

R1 SG 台湾 FW

11/18 (月)

本日の午前中は、教育学を専門とする、葉女史と共に研修を行います。

まずは田原・中田ペアが、週末のフィールドワークの成果を反映させたプレゼンを行いました。台北市内の大規模公園、大安森林公園で行ったアンケート結果によると、相当数の親御さんが、台北の公園設備に満足していると答えました。これは葉女史の予想を裏切るものだったと言います。葉女史は 50% がいいところだと思ったとのこと。

馬場・原科ペアもフィールドワークの成果を反映させて発表しました。北投図書館は素晴らしい環境で、科学館も子ども達が体験的に楽しく科学に触れられるアトラクションが豊富にあったとのこと。学生とのインタビューも、サンプル数は少ないですが、その分濃いディスカッションができたようです。

葉女史からは、学術的な見地からたくさん助言をいただきました。統計を取るときは、回答者の属性、例えば、母数や性別、年代を分類しておくようにと助言いただきました。サンプルを集める際には、事前に熟考して、考察の際に役立つ指標をあらかじめ担保しておくことが大事なのですね。また、調査方法には大きく帰納法と演繹法の 2 種類があり、いずれも必要十分に論旨を支持できるだけの証拠を集める意識をもって調査に臨むとのこと。いずれも科学的な研究において重要な視点であり、生徒達はよい学びを得られました。

葉女史にはその後「教育改革—創造性の習得を通じて」と題して講義していただきました。現代社会は、近代的な教育システムでは充足できないほど大きく変化してきています。台湾における親の学校教育に対する満足度は 37% と非常に低く、子ども達の間にもインターネット依存やゲーム依存などが広がっています。こうした社会的背景のもと、台湾では初等中等教育の 12 年間を貫く、抜本的なカリキュラムの見直しが進められています。

中等教育における方向性としては、生徒一人ひとりに寄り添った指導、必修科目を減らして選択科目を増やす、高校一年生相当の学年からポートフォリオを蓄積する、といった、日本政府が掲げる方針と似通ったものが示されました。

AI の進展によって、将来的に必要とされる仕事も、職業観も様変わりすることになります。そこで重要となるのは、教育においていかに創造性を養うかという視点です。創造性と言っても、それには大きく分けて二種類あると葉女史は言います。いわゆる天才を表す “Big Creativity” と 日常のちょっとした一コマに工夫を凝らす “Little Creativity” です。

葉先生は後者に着目し、小さなアイデアが世界を救うこともありうる、とてつもない可能性を秘めているため、それらを育てるカリキュラムを模索しているとのこと。例えばこんな課題があります。眼前に無機的なただの円が示されます。2 分という制限時間内に、生徒はその円に自由に筆を入れ、意味のある図なり絵を描くというものです。生徒によっては、制限時間内に単純な線を書き足すだけで、できるだけ多くの表情を描写します。これは、“Little Creativity” の内、“Fluency” が高い生徒であると言えます。一方で、制限時間を目一杯使って、円の中に美術的に微細な顔を三つだけ描く生徒もいます。その生徒は “Elaboration” が高い生徒であると言えます。“Creativity” の細目において、「素早く

たくさんものを思いつき形にできる」創造性と、「ゆっくり時間をかけて質の高いものを生み出す」創造性は、対極にあります。いずれかに優劣があるわけではありません。このように、“Little Creativity”を細目化し、それぞれを妥当に評価する基準を設けることが重要なのです。

みんな違って、みんないい。お互いの資質を尊重し合いながら、AIに負けない創造性を、楽しい課題を通じて身につけていく。そんな教育、聞いているだけでワクワクしませんか。

ちなみに、創造性を磨いていく上で一番の鍵になるのは、生まれ持った才能でも、経験値でも、教育につぎ込んだ費用でもないと言葉先生は言います。大事なものは、凝り固まった頭で、自分にはそんなことできない、なんて決して思わないこと。きっと自分には何かができる、今の自分にはできなくても、いつかの自分ならきっとできる、という心構え、換言すると前向きな姿勢だとのこと。二週間、楽観的で明るく、情に厚い台湾人に接してきた我々には、それくらい容易いように感じられます。旅先で浮かれているだけかもしれませんが、もしこの二週間でそうした台湾の良さをわずかながらでも体得できたのであれば、この研修は有意義であったと言えるのでしょう。

“Growth mindset is almost the same as positive attitude, which is the most important strategy to improve your creativity” また座右の銘が増えました。

ランチタイムはお弁当をいただきながら、政治大学で日本研究を行っている石原忠浩先生によるミニ講義と質問タイムです。昨年度も講義でお世話になった先生ですが、今回はもともと予定にはありませんでした。たまたま石原先生が田中マラソンに参加し、本校の生徒と出会ったことで、石原先生の方からまたお話をしたいという申し出があり、今回のランチタイムミーティングが実現しました。台湾の歴史と日台関係についてポイントをまとめてお話をしていただきました。

台湾の歴史を少し勉強すると、1894年の日清戦争をへて約50年間日本が植民地統治したことを学びます。また台湾人には最初に中国福建省から渡ってきた本省人と、第二次大戦後、蒋介石とともに中国大陆からやってきた外省人、そして先住民の少数民族がいることを知ります。石原先生は、「私たち日本人が台湾で出会う多くの人が、親日的で日本語が話せる方が多いことから、全ての台湾人がそういう人だと思いがちだが、必ずしもそうではない。私たちはとかく、外省人＝国民党支持的→日本人的に見て×、本省人＝民進党支持＝民主的→日本人的に見て○、というような一面的な見方に陥りがちであるが、必ずしもそうではない。まずは日台双方がお互いのことをより深く理解することが、今後も日台関係がますます発展するために重要である。」と話してくださいました。多くの日本人が思っている台湾に対するステレオタイプ的な見方が、すごく浅く一面的なものであることに気づかされました。

午後はいよいよ最後の仕上げのプレゼンテーションです。午後のオーディエンスは、私たちのお世話をしてくださっている政治大学国際合作事務所の李さんと、政治大学日本語学科の周君と陳君の三人です。

今年のメンバーのプレゼンテーションのスライドは村尾さんから教えていただいたことがしっかり反映されたすばらしいものばかりです。また、スライドだけでなくプレゼンでもオーディエンスに問いかけ、興味を引くような工夫が随所に見られています。そして何より頑張ったことは、どの班もプレゼンに2日間のフィールドワークで得た知見を取り入

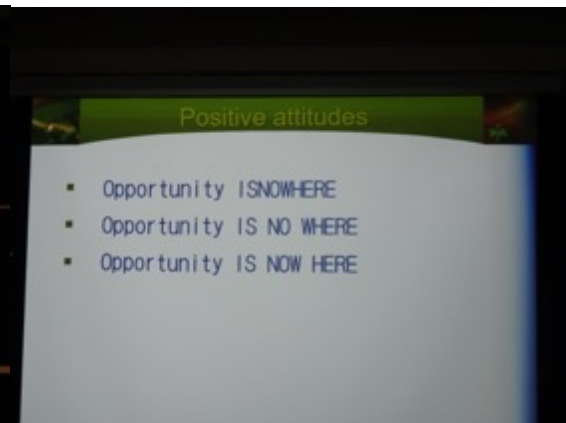
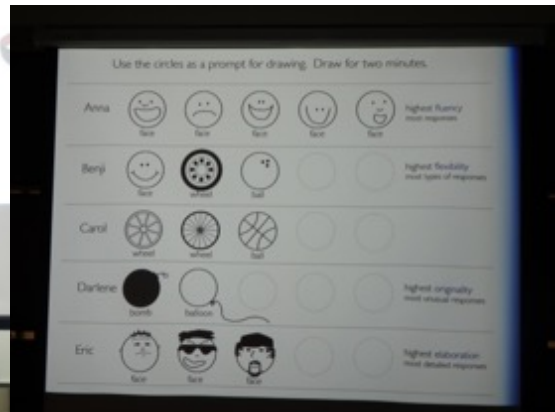
れ、今後の取り組むべきアクションプランまで提示できたことです。わずか一晩でスライドを追加、修正し、結論を述べるまでしっかりと発表できました。アンケートの集計方法、実施場所等で結果大きく異なることや、それによって考察の根拠が弱くなることなどの意見をいただきましたが、それらは盛岡に帰ってからの課題です。しかし、これほど完成度の高いプレゼンを目にすることができて、本当に幸せな1日でした。

全ての講座が終了したあと、政治大のプログラムがすべて修了したことの証に、李さんから生徒一人一人に修了証が手渡させました。会場を去る際に李さんから「あなたの学校の生徒は今まで見た中で最も素晴らしい生徒です。」と最大限のお褒めの言葉をいただきました。これもまたうれしいことでした。

そのあとは政治大学でのフェアウェルパーティーということで、バスで台湾大学わきのイタリア料理のお店に行きました。なんとそこは、バイキングつまり食べ放題のお店でした。パスタ、ピザは注文してから作り始めるので、熱々が食べられます。その他ローストビーフなどの一品料理や、サラダ、フルーツ、そしてデザートのカッキー、ハーゲンダッツのアイスクリームまで食べ放題なのです。生徒たちは大喜び！お世話になった政治大学の学生さんも3名同行し、2時間余り交流に花を咲かせておりました。日本語学科の学生さんにはこの5日間、本当にお世話になりました。謝謝！

このプログラムもいよいよ明日の政治大学附属高級中学との交流を残すのみとなりました。明日はまた学校紹介で第十応援歌が鳴り響くでしょう。





3. 台湾の国際的地位と日本にとっての台湾

- 台湾は国なのか？ 違うのか？ 如何に立証する？
- 国際社会の承認の有無。承認国家が少ないから非国家なのか？

	国交国	国連加盟	経済規模
日本	195	○1956年加盟	3位 4.8兆ドル
中華民国	15	×1971年以前加盟国	25位 5720億ドル
中華人民共和国	180	○1971年以後加盟国	2位 12兆米ドル

- 国際社会における承認は実力、国力、国際情勢が決定。
- 日本社会は日台断交後、台湾の存在に対して思考停止に陥る
- 戦後日本進歩派の中国観は「日中間は友好ベース、歴史問題は日中両方を認め、台湾問題は中国の主張にできるだけ配慮」
- 民主化とある人物の登場により日本の台湾認識にも変化が

8. むすび

- 日台関係は全体的に良好だが、克服すべき課題も
- 日台関係は米国、中国等周辺国の影響を受ける
- 中国は随時、日台関係の進展に関心
- 日本側は台湾の「好意」を当然視しないこと
- 日台双方は引き続き知日派、知台派育成に努力を！
- 相互理解の深まりが、関係をより強固にする

